

日本建築家協会の機関誌「J  
I A M A G A Z I N E」32  
5号に掲載されている、建築家  
・出江寛氏の寄稿「オリゾン  
ク新国立競技場を再考せよ」は、  
建築設計者にとって新国立競技  
場の問題に限らず、極めて示唆  
的な問題提起である。筆者も常  
々思い悩んでいたことではある  
が、自然と建築の関係性である。  
出江氏は、あくまでも「記念建  
築物」に限ってとしながらも、  
それらの建築は「自然と融合す  
るべきではありません。なぜな  
ら、『記念建築物』は『その時  
代時代の文化遺産』となるから

です」と極めて明快に論じてい  
る。そこに、筆者は覚醒させら  
れた思いで共感したのである。  
しかしながら寄稿文には、多  
少誤解を招く恐れがあるように  
思われる。確かに、森の中にた  
たむタワー・マハルやアルハ  
ンブラ宮殿、さらにはシドニー

4/8 建築家  
出江寛  
建築家・出江寛氏の  
見識に思う

建設  
論評

のオペラハウスなど、どれをと  
っても緑に覆われることの想像  
はつかない。それらが緑に覆わ  
れたら、もはやそれは廃墟であ  
る。誰も寄り付かない孤高の死  
の世界である。それゆえに出江  
氏は、記念建築物は自然と「対  
立」する存在であると指摘して  
いるのだが、そうした明確な二  
項対立が成り立ちうるのか、多  
少違和感がある。

建築は自然と融合するのでも  
対立するのでもなく、共存して  
穏やかにたたずむものであると  
の理解を、現代の多くの建築家  
ばかりではなく一般の人々もそ  
うした思いを持っているのでは  
ないか。とはいえ現代建築は、  
「自然」に対する畏敬の念から  
くる共存のあり方を忘れて、安  
易に、植物の美しさなどを建築  
に取り入れて事足りりとしてい  
るようだ。そして、それが理に  
かなった正しい方向であると思  
い込んでいる。はたしてそれは  
正しいことなのだろうか。

例えば、芸術性の高い彫刻の  
場合はどうか。それらが植物  
(緑)で覆い尽くされることな  
どあり得ないだろう。緑に覆わ  
れ、その崇高な全体像が現れる  
ことがなければ、その作品の存  
在など無きに等しい。

さらに記念建築物とは、出江  
氏も指摘するように、そうした  
美的芸術性のみを追求する彫刻  
作品以上に、「美学、政治、経  
済、技術、材料、ニーズ等を反  
映した」その時代を象徴するも  
ので、後世において、その都市  
や町の歴史や文化を知る上で重  
要な手がかりにもなり、極めて  
永続性の高い存在である。それ  
ゆえに「記念建築物」となるの  
である。もちろん、記念性が強  
くない通常の建築も、社会や都  
市の共有財産である。そのよう  
な建物についても、植物とのか  
かわりを安易に考えるべきでは  
ないと思つ。垂直な壁面を覆う  
大規模な緑化なども不自然極ま  
りない。立ち枯れしている植物  
の姿ほど見苦しいものはない。  
植物は生き物なのである。省エ  
ネ対策や環境配慮という聞こえ  
のいい言葉に惑わされて、よう  
した緑化を推進する傾向には疑  
問を禁じ得ない。地面に根付く  
草花や樹木とは異なる点を理解  
する必要がある。

自然への畏敬の念と人間の尊  
厳がつくるものとしての建築を  
考えることの哲学、そして植物  
と建築の関係について、出江氏  
に改めて考える機会を与えられ  
た。

(界)